

短期派遣 EUROPA 派遣報告書

1. 氏名

近藤野里

2. 派遣先大学名

パリ第 8 大学 (フランス)

3. 派遣期間

2012 年 10 月 2 日 ~ 2013 年 2 月 14 日

4. 派遣の概要

2012 年 10 月より約 4.5 ヶ月間、フランスのパリ第 8 大学博士後期課程において、博士論文研究テーマに関わる調査研究を行った。なお、派遣先であるパリ第 8 大学では、同学の Joaquim Brandão de Carvalho 教授 (音韻論) に指導教員をご担当いただいた。

研究テーマ

博士論文では 17 世紀から 18 世紀において、リエゾンがどのような統語的コンテキストで実現されていたかについて、当時の文法家による発音に関する記述をもとに調査を行う。16 世紀から 18 世紀はフランス語の規範が整備され、確立した時代であり、この頃に発音の規範も確立されたといえる。本研究では、最終子音の脱落が 17 世紀から 18 世紀にかけてどの程度進行していたのかを考慮しながら、現代フランス語に見られるようなリエゾンの義務的、選択的コンテキストの区別がどの程度確立していたのか、という疑問に答えることを試みる。当時の発音が綴り字に工夫したもの、もしくは発音記号を用いられて書かれた文献を分析し、同時に当時の文法家のフランス語の発音に関する記述を調査することによって、特にリエゾンの義務的・選択的コンテキストの区別に関して、統語・形態的要因の影響について調査を行う。

派遣の目的

今回の派遣では、16 世紀から 18 世紀の文法家が提示した語末子音に関する記述に関する一次資料の調査をフランス国立図書館で行う。また、分析に必要な 17 世紀末、18 世紀初頭のフランス語の発音を記述した 2 つの文献 Milleran (1692) および Vaudelin (1713, 1715) のコーパス化を行い、分析を行う。パリ第 8 大学での論文指導教官の Brandão de Carvalho 教授による指導、また Wauquier-Graveline 教授 (幼児の言語習得、音韻論) によるリエゾン研究についての授業を受講することによって、博士論文の調査をより確かなものとするを目的とする。

5. 活動概要:

派遣先での主な活動は、大学院のゼミへの参加、図書館での資料収集、指導教員との面談、論文執筆作業であった。

ゼミへの参加

パリ第 8 大学の言語学博士課程では、言語学を研究する学生全体のゼミが月に 2 回開か

れている。これは言語学のひとつの分野に絞らず、誰でも参加できるゼミである。毎回、担当者 2 人が発表を用意し、その発表に関して意見交換を行うという趣旨である。私は、同じくリエゾンの研究をしているイタリア人の友人とリエゾン研究の全体的な概要について発表を行った。

パリ第 8 大学ではパリ第 7 大学と協力して、月に 2 回音韻論研究会を開催している。この研究会では、音韻論の研究を行っている研究者を招待して、発表を行っている。対象言語も様々で、フランス語以外の音韻論の研究や最先端の理論研究について触れられたことは大変刺激になった。

指導教官との面談

指導教官との面談は基本的に月 1 回行われた。最初の面談では、指導教官の Brandão de Carvalho 教授に、現時点での博論の進捗状況を伝えた。その後の面談では、17 世紀、18 世紀における韻文の研究の重要性の指摘、また 14 世紀~15 世紀に進行した語末の e がリエゾンの成立にどのように作用したかについて話し合うことができた。

その他

その他の活動として、報告者の研究テーマに関わる研究会への参加が挙げられる。2012 年 12 月にパリで行われた IPFC (InterPhonologie du Français Contemporain) 学会、2013 年 2 月にパリ第 10 大学で行われたリエゾンの研究会へ参加した。また、ドイツのヒルデスハイムで行われた ITP-EUROPA 国際セミナーで研究発表を行った。

6. 派遣の成果

派遣中の成果として、Vaudelin (1713, 1715) のコーパス化を終了し、分析を行った。また、Milleran (1692) のコーパス化が集中的に行った。16 世紀から 18 世紀の文法家が提示した語末子音に関する記述に関する一次資料の調査の一部をフランス国立図書館で行った。これに関しては、Palsgrave (1531) や Tory (1529) などの文献を読むことで、当時のフランス語の発音が文法家によってどのように認識されていたかについて概要をまとめることができた。

また、1 月の後半はヒルデスハイムで行われた国際セミナーでの発表を原稿に書き直す作業にあたった。このセミナーで発表した内容は、先行研究をまとめる上で重要なリエゾンへの理論的アプローチについてであるが、発表の準備および原稿の執筆を行う過程で、理論的アプローチの利点や問題点などが明確になったと感じる。

7. 今後の課題

今後の課題として、Milleran (1692) のコーパス化を派遣中に途中までしか終わることができなかつたため、今後も引き続きコーパス化を行う。また、コーパス化が終了次第、分析を行い、Vaudelin (1713, 1715) と Milleran (1692) におけるリエゾンの実現についての比較を行う。また、文法家による語末子音に関する記述については、特に 17 世紀以降の一次資料について更に調査する。博士論文の執筆に関しては、現時点ではリエゾンの研究に関する先行研究の章の執筆を始めた。本派遣で得られた成果を踏まえ、博士論文執筆作業に尽力していきたい。